

半沢直樹というドラマが話題になってきている。このドラマの平均視聴率は20%を超え、前作を含めて一種の社会現象になった。銀行の次長である主人公の半沢直樹が、悪役（基本的に銀行の上司や権力者）と対決し、最後には、相手を土下座させる勸善懲惡もののドラマである。

このドラマがここまで人気があるのは、次の点が挙げられる。

一つ目は、正義の味方と悪役の対立構造が分かりやすいこと。悪役は、セリフからも態度からも超悪役として描かれている。

二つ目は、正義の味方は、最後に勝つというワンパターンものであること。また、悪役は一人ではなく、何人も別の立場から現れて、半

半沢直樹



沢をつぶしにかかってくる。一時は、四面楚歌 絶体絶命のところまで追い込まれるが、その一人一人を説得し味方につけていき、最後に残ったラスボス（ロールプレーイングゲームやシューティングゲームなどの最後に登場する敵）を倒すというものである。これは、若いころによく見た水戸黄門やウルトラマンに近しいものがある。

最後にそれを演じる半沢直樹が中間管理職であり、だれもが感じる身近な存在であるということである。

そのなかで、悪役である上司や権力者に対して反抗し対決していくことに、視聴者はエールを送っているのである。

しかし、実際はそうではない。いくら悪いと言っても、上司や権力者に反抗することなどありえないのである。そもそも本当の悪役など、世の中には存在しない。特に、白黒をはっきりつけることを嫌がる日本人のなかでは、良い事も悪い事もみんなで行い、責任はどこにあるか、誰が悪いのかをわかりにくくしている。言い換えれば、リスクをみんなで分散させているのである。

一方、諸外国では、今のアメリカ大統領選挙の討論を例にとっても、相手を悪役にし、いかに相手が間違っているか、自分がいかに正しいかを言い合っている。この責任の所在を明確にしないという事が、いざ問題が生じたときにおいても、原因の追究がいまにも、原因の追及がいまにもなくなり、対策もいまいになる事につながる。結果的に判断・実行に時間がかかってしまう事になる。この事が今の日本でいろいろな状況において、生産性を落としていけると言われている原因の一つであるように思う。まして、白黒をはっきりさせ、決断を早くしなければ、会社を健全かつ迅速に経営していく事などできるものではない。半沢直樹のリスクを恐れず迅速に動いていく行動を見て、改めて自分の仕事はどうなのか、自問自答をする日々である。